紀伊國名所圖會

後編

三之巻

在田郡

和書門
類
三六五五二
號
一二
函
一三
架
六
冊

内閣文庫
和
書
類
三六五五二
號
一六
冊
一七
函
一一
架

内閣文庫
番號 和 36552
冊數 6 (3)
函號 176 11

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

紀伊名所圖會後編巻之三

目録

田殿荘
田口村金柑畑圖
鏡峰
紀臣馬養故居
禪長寺
衛の森
釜中瀧 幷図
生石神社
延徳寺
如意輪寺
歡喜寺 幷図

藁筆
琉の滝 幷図
新山氏
觀音堂
長樂寺
成道寺
天一神社
興台寺
生石嶺 幷図
丹生神社
明恵上人遺跡圖

高野明神社
夏瀬丹生神社
藤並荘
宗祇誕生地 幷肖像 真蹟写
大頭明神社
女瀧
菖蒲嶺
烏帽子岩
笠松
藥王寺
明恵上人誕生地

内崎山 幷図 那耆耶峰
神谷
吉備郷
天満天神社
石垣荘
岩戸関 幷図
蹴割如来堂
次の瀧 幷図
大月峠
鳥屋城址
八幡社

筏立山
平等寺
御靈八所宮
小舟池
鮎瀧 并図
阿弖川荘
産物火縄
四村谷
白馬山
産物棕櫚皮
醫王嶽
清水
岩倉神社 并溝淵神社の図
子安地藏堂
生石宿社
産物肉桂 并図
雷石
岩倉神社 并図
丹生神社
二川村より楠本村に至る図
善福寺
純白瀧
生石神社
鮎関
八幡宮 鳥居杉
證誠觀音堂 并図
御靈社
若宮八幡宮
那古野
石垣尾神社 并図
芋瀧
安樂寺
河合瀧
觀音堂
明王寺
藥師堂
河瀬川城址
川津神社
垣倉
古墳
大乘寺 并法會之図
糸川谷
山保田荘
丹生神社
みそぎ川
大梵天王社
綾裏瀧 并図
遠井辻
宮川
産物保田紙 并図
阿弥陀堂 并御田踊図 并結的図
志傳の木
八王子社
城が森鐵 并図
郡堺
温泉
國堺
丹生神社
平惟盛窟
湯川
日光神社

田殿荘

十三ヶ村を總ぶ總稱にて庄の東にあり庄の名は弘安正應頃の文書に屢く見えたり

御幸記云 九日今日偏文義得意等沙汰田殿荘□女房中納言殿便書遂不見参湯淺宿所の條にも見えし

葉筆

田口村にあり其製が家にて製し大に民を天文の頃より此地に居住して葉筆を細く製し無く風流を好む先代龍麿といふもの此筆を以て長毛にして太筆を製し次郡寺精好兎毫筆毛にも劣らずとて諸侯に献しけるを珍重し次官にも擬して嘉賞し今にそれ製を傳へたり

高野明神社

井口村にあり社家より遷せし次洋にて反別彼の條下に詳らかなり

内崎山

同村にあり明恵上人の舊蹟にて上人八十八ヶ所の遺跡也上人の開基なり

那賀耶峯

千塔山といふ海部郡堺村と堺せる高峰なり

元亨釋書明恵傳云

承元二年上人還紀州於内崎山創伽藍

八所遺跡記云

内崎山は崎山兵衛尉良貞の舊宅なりと良貞の後室尼公は明恵上人の姨母なれば此處を三寶に施與し伽藍經藏を興造し佛像聖經を安置す其後草庵を搆へ上人をむかへ奉りし庵の後に那賀耶の峯といへる嶺ありて遠く西面

国立公文書館 National Archives of Japan

内嵜山
毎年秋社の日
當庄及藤浪荘
十三ヶ村より
出る所の競馬
鳥居戸の上の宮
より神輿
を供奉し
左田川を
南に渡りて
祢喜居を経
吉田村の邊
より又北に
渡りてこの

山下に見ゆる
井口村にも
家々に至る山上
より此を
望むにその
水を渡る行粧
悉く眼下に
顕れて
いと壮観なり
菴

田呂村金橘畑の圖

国立公文書館
National Archives of Japan

川をとゞめりきに随て細きよりて秋末に至りて太流濱義抄

姥が瀧

一名披津の瀧ともいふ
国解村の小谷田殿の山中にあり高さ十丈許奇巖嶮絶として 此恵傳紀にも此地のさまみえたり
飛瀑甚だ小鋭なり楓樹林樹繁り落ちて更に又其奇觀と動く流れ下りて
神社ありおほひに老樹の傍戦紀まて昔人嚴激に落地の時は老婆が数瀬によりて
此その旧地をゆるされしより果人嚴數に落ちて肖像を尸祝しといふ

夏瀬丹生神社

出村の小名なる丹戸に河内川の北に坐す洪水に流失せて磯に拂まる處の岸の東といひ
傳くる四月卯日及巳中の巳日並にその日より九月十一日に至る迄祭礼あり

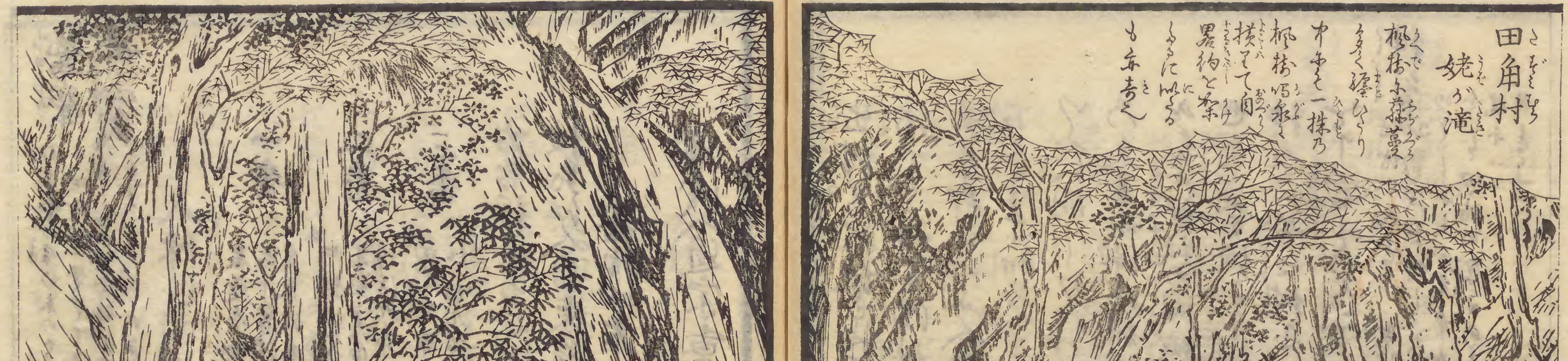
丹生告門云
那賀郡松門所尓太坐下坐安梨諦夏瀬丹生忌杖刺給比
東本にて安諦郡と記されたるを大同年中に郡名を改められし
のちに諦を梨の字を加へ郡にて諦の字を除きしなるらん

應神天皇の御世丹生津比賣大神本國伊都郡奄田村
今の名は花村 **の石口に天降坐天野社に鎮坐しましますまで愛しく遷坐したまひて此地にも暫くおはしまして當社を建て神田とも寄られしなるべし社地にとなりて丹生村及び丹生村の名は仁壽四年の古券にみえたり古くより社地及**

出村なる地まで丹生といへるなるらん社地よりも川を
隔てゝ丹生津村といへり文保元年の文書に丹生津
彦十郎といふ人ありて此地よりおこる氏なれば其村名にや
古き事知るべしかくて丹生郷の圖を田制の條里の縁と
いふに同じければ丹生の神田にさしたる名なるべし又仁壽
の文書に神奴知鳴といふ人ありて當社に奉仕せし人なるか
又天野社の同域に高野大明神を祀るあるをもていはゞ乃
世に當地にも拝殿とせしと其後靈夢によりて高野
神を丹生口村に遷し夫よりて當社を上宮といひ高野神
を下宮といひて祭日には神輿下宮に渡御なる 神を鳴し田氏

神谷

社地に瀧あり 鳥羽院の御時 美福門院の御願により 玄藏師天野社に並ひて
伽藍を建立し大門よりも奥院まで八町とし丁石を建て二十一ヶ坊
ありしに天正年中寺院を没収せられ御堂氏堂舎を破却さしめて後のち
今はたゞ田地の字にのみその名残あり 舊跡の佛像なども失せて
院に一二
残れり


田角村
姥が滝
楓樹に藤蔓
多く纏ひより
中にも一株乃
楓樹が偏に
横ふて自
畧彴を架
るに似る
も亦奇之

鷲峯（じゆぶ）

崎山氏（さきやまうぢ）

すゞやの峠の東の高峰より明恵上人八所遺跡記に糸谷の後峰十八町を登て高峯有り鷲峯といふ云々とあるも是なり

其ふ中村に住じ湯浅宗光の後といへり元應以来の文書の古寫数通を蔵む其文左に引用せり

八條辻固湯浅御家人等事

一番 嚴並左衛門尉 得田左衛門尉平朝
六十谷次郎 幸保朝 保田中三郎兵衛尉光平朝
宮原次郎左衛門一朝

二番 朱 阿頭祖父湯浅左衛門宗弘朝 糸我刑部紀貞重朝
木本左馬尉宗時朝 同次郎兵衛尉宗高朝
湯浅九郎景元朝

三番 朱 田殿庄木至圓明父沙弥浄心朝
得田九郎光弘朝

右名親者相共可二月勤仕也惰怠候者事之由上えて可申上云
被勤仕人名交名所註奉候也

嘉禎四年十月日

朱 前司殿 左衛尉

湯浅入道宗重法師孫本左京結番事 次第不同

一番	田殿荘下方 朱 他門 加大豆田 八ケ日定	正月九日まで
二番	朱他門 田仲荘	同十九日まで
三番	糸我荘	同廿七日まで
四番	石垣河北荘 加茂谷川村定 丁埴津今年除之 多公文分三ケ日及去年定一日一夜定	二月廿七日まで
五番	濱仲荘 除九田 彩庄三ケ日 加大崎 加小倉	三月十八日まで
六番	他門 宮原荘 他門加当麻井村三ケ日 荘三分一役今年除之	三月廿八日まで
七番	石垣河南 丹生図 十ケ日	四月廿日まで
八番	湯浅荘	五月晦日まで
九番	同荘 多須原	六月廿日まで
十番	他門 六十谷紀伊濱	七月廿日まで
十一番	芳養荘東西	八月十日まで
十二番	保田荘 加九田大崎 岩室門 阿弖河上方半分之	十月二日まで

十二番 阿弖河荘上下 除上方半分
十四番 北門木本東荘 加三条河一日 土松名一日一夜定
十五番 同西荘
十六番 田殿荘上方
十七番 北門藤並荘
右守結番次第無懈怠可被勤仕之状如件
正應二年十二月日

同月廿八日まで
十一月廿六日まで
十二月廿六日まで
明年正月十一日まで
二月六日まで

藤並荘（ふぢなみのしやう）

田殿荘の南に接して十一ケ村を統ぶ

花営三代記云
永和五年二月九日山名修理大夫同陸奥前司伊与守等
入紀州有田城藤波之湯浅城没落

吉備郷 和名抄郷名の一なり今下津野村の小名に吉備野あり不詳荘の内荘村の北川を吉備の部といふもいへり其境に吉備の井の名もあり古名の残るなく郷名は既く廃れしより田殿の荘といふ田村に宝亀元年神社あり元文五年吉備名方浅宝といふ碑を建て又

吉備野にも同じ碑を建つるは吉備郷の名のよれるなりとこの地にをいらさず

紀臣馬養故居 今俗に皆呉紀に見えたり 全文は日高郡の條に出せり

観音堂 野田村にあり観音大伽藍なりしか今石地蔵 田地となれり

宗祇法師誕生地 下津野村の小名吉備野にあり寛文雑記に宗祇屋敷跡あり 又古老の言伝とて宗祇の生れ所をいへり 今その家も絶えたり 宗祇の事は諸書に詳なれども其一二を下に載す

自然斎宗祇法師は一号見外斎又種玉庵と号す 汝俗称詳ならず 或人の説に姓を二善氏と云ひ又飯尾といへりこれを以て応永廿八年に生る 又云は左馬介房に児ドて左房を宗祇の俗称とするなり 吉備野はむかし伎楽師の居住なるより 宗祇此地に生れたるなり 父は伎楽師なり 邑に始めて出生せし 宗祇生れて性風流を好み少くより伎楽を廃て学問を以て一律院に入て薙髪し志を和歌連歌によする 連歌は後花園天皇の御時より中興して達者甚多くおて其道天下に行はれし永享文明の間尤盛なるが中に十住心院の心敬法印角堂乃専順山名の家士宗砌等の名誉治世にゆるしたれば宗祇

宗祇法師集

自影の讃

うつしおくわか
おもかげも
世のうきを
見ぬ翁ぞ
うらや
まれぬる

宗祇自讃の肖像世に伝たるとぞ此像は
狩埜永納が蔵せる所の古法眼元信が筆
といへる写をゆくりかに摸く

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

宗祇

[illegible]

[illegible]

本國を去て心敬に年頃親炙し專順宗祇等に學びて
按ずるにさゝめごとの奥書に寛正第二天雞賓上旬紀州田井荘八王子社参籠中彼辺牧童等連哥せ馬用心一冊類憤望依難去卒爾所浮短慮任筆云云 釈心敬と記せり 寛正二年は宗祇が四十一歳の時に當れり其頃心敬高名なる五十歳宗祇親炙せしなるべし
一家と為し其本は宗匠と称し
貴族公子等と交を結べり
茶の本此名ハ後撰依院の御時見沙つ堂法橋を称ゆる尾等の手より下にて去らぬ連歌ありつ称せしより其本の好士と称して地下に名をとゞろかす人多かりければ後世連歌地下宗匠の名称となれり
又和漢聯句に長じ雪嶺周舟に
此名聞しを以て後年東山に草菴を結びて種玉庵と名づく
其號種玉は源氏別名播志に種玉菴を載て宗祇法師菴也傳云在于東山不知其所載云祇公没後宗長法師領此菴三年 按ずるに宗祇三面尽辰為連衆歎種玉菴在圓山安養寺と云へり
又法輪寺の傍にも一年餘りて住りその頃
伊豆國三嶋に東左近大夫平常縁といふ士あり世に東
野州といふ其先胤頼ハ法人にして弓馬の暇志を歌に
よ次胤頼の子平重胤嫡家の好によりて二條家の秘要を授
りて世々其道に怠惓せず常縁に至りて堪能なりしかバ
宗祇是に入りて歌道の奥儀を窮めむと志して文明三年

京と去りて三嶋に至る常縁其志を感じ古今集の玄旨
を授く是を古今傳授といふ時に年五十二後年又これを
牡丹花肖柏に授く夫よりして世々絶ることなく此道に授ぶ
もの的々受授して今に至るハ此時に權輿せり
老人雜話に宗祇ハ今よりて百五十年以前の人なり其時念の給仕せし成安といふあり老人その成安に逢て曰連寄の式盛にとりくるゝ宗祇よりとぞ其以前ハ百句満る事稀なりてたゞ一つ二つのやうにありしとぞ
宗祇又書を善し書法流を立て一家を為せり
万寶全書に宗祇ハ何流といふ事をえらず但長門国一之宮に宗祇の短冊二枚あり是を見るに一枚ハ勅筆流に似て後に去る表也
和歌連歌尺牘等に墨蹟尺楮寸紙といへども天下
これを珍蔵せしこと、宗祇稀世海内に籍くとして遂に 天聴に
達し 勅して禁内に召しめ給ひ俗姓を称せさせ給ひけるに宗祇ハ早
卑の身なる事を憚りて偽りて湯川政春が族なるよしを勅答
申しつれば湯川ハ本國の著姓にて政春ハ宗祇が門下なりしかバ僞和
にかくハ申しけるとなり後政春に此事を語りければ政春が面目なる

まことに深く悦びしよりて遂に湯川氏を冒せり 湯川寿韻集覚書に宗祇湯川氏を冒
此時あられ名をかうや山寿がごきれといふ発句を吟じしが故寿たゞ〆のも
もそみ〆の志うゆるさと撰句を和したるよしを書せり然れども宗祇発句集
に小野の連哥所を行づくれる時のうちし其時の連哥百
韻の其を書小野の文に納めたれバ先生の號を混ずるか 宗祇是に定むべく
旅泊を家とし西ハ九州を窮め東ハ奥州を尽し晩年
又小地に指びて越後に止る事凡三年再又関東に指び
病に会ひて相摸国に止る文亀二年七月晦日湯本の旅舎
に終焉す次時年八十二相摸武蔵の境桃園定輪寺に葬む
縉紳家及門人等其忌おとに追悼の哥を詠じ連歌興
行せし事諸家の歌集等に見えたり宗祇ある和哥
連歌の達新撰せざるハなく天下の連哥師其名右に出る者
なしされバ其頃よりも此族みや霊云ふて自負ある事あり
宗祇の蚊帳といふもありて宗祇と同じ蚊帳に寝くりと
いふ意なりとぞ此法師を深く尊みし一端を知るべし又

宗祇が門に入て連哥に達せる者多し肖柏宗純宗長宗碩
等なり世に見ゆる宗祇が右筆を宗坊といふ又連哥を善次
宗祇連歌の式法を定る事多し明應四年 勅裁奉て
新筑波集を撰次時に七十五此より前文明十一年おい乃
すさみ一巻を著して打回古市左衛門尉に授く其他著次所歌
集発句集吾妻問答筑紫乃記児教訓名所方角抄等なり

天満天神社 やしろ天満村にあり左中下洋野村を除きて九ヶ村の産土神なり

社傳に天元三年国司菅原有忠霊夢を感じて山城国北野
社より勧請すといふ実村の大歳明神を濱宮とし八幡宮並
御旅所とす又祭礼の時神輿渡御ありて祭日中ハ両社の神と共
に當社に来りて神事となす次流鏑馬あり又畠山氏の時まで
ハ社領多し小豊臣関白の時没収せらる當社もとハ両部に祀りて
し今本地一とすまでも児玉紀に幸国神名帳本国歌の中

に天満天神并十万八千眷属左右二氏神とするハ是なるか
疑しとする 今佛名の帳にも氏神を載せずといへども天神にありしならむ 神器ハ宝徳二年
藤並美寄附の品あり 其形円にして変て今具をとちつる板あり 銘に御正体一面と記り後を納めける箱の蓋の表
なり 雷石ハ御形とて雷除の神符を諸人に與ふといふ 符ハ之を塔に集 ハ三
べし

霊宝山禅長寺 西山派総持寺末

院名坊あり今境内に移れる天王山明王院まで並び寺をも其一なりといふ今ハ社務にあづかる次 去生村にあり浄土宗

開基深誉といへる僧ハ中奥寛山嶺院誉云上人永正十一年当村の領
主宝山ハ麓にありし堂社を今此地に移次 古ハ主田
日高海部二郡の内にて末寺凡十八ケ寺ありしに今ハ九ケ
寺となれり 浅野家の時寺領七石を寄附せらる 元和以
後も此に顕用せらる 什物の中に涅槃像の一軸あり古色にして

摩尼山長楽寺 中野村東谷にあり 禅宗臨済派海部郡由良興国寺末

法燈国師の隠居所にて 後亀山院の御宇七堂伽藍を

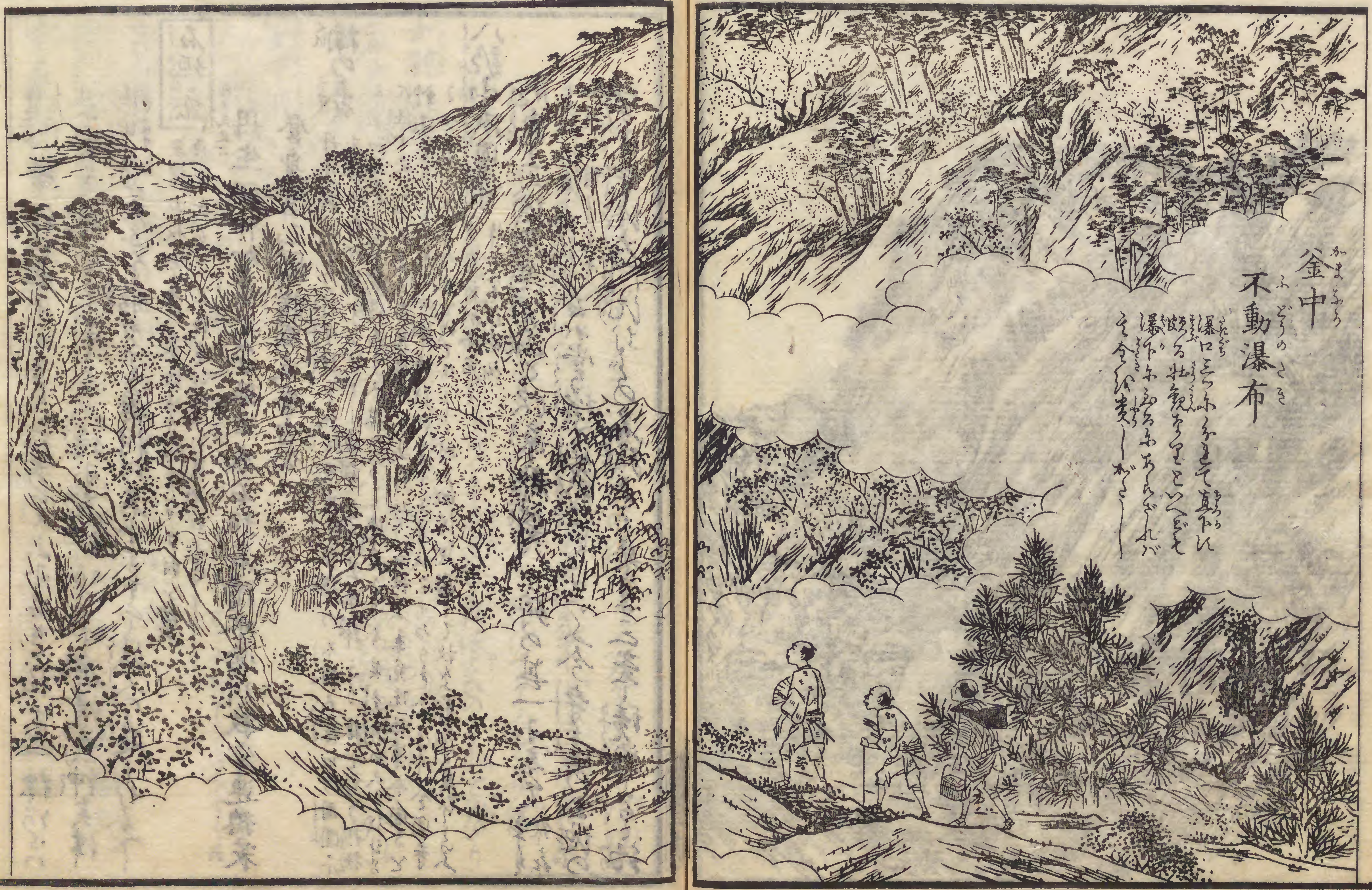
建立し給ひ 寺領二百貫民家三十六戸を寄附し給ひ
し 其後伽藍荒廃上ませて天正五年二月に殘に方丈間
の佛殿を再興ましまして 此佛殿今猶存し 昔世の堂社と異れば棟低く柱みじかく変化にて古質なり

大穎明神 奥村の内芸勢の里にあり

当社ハ神代の神にいらず 永仁の初藤並郷に十九人の長ありて
各宅地若干を領せしが 其北條貞時の代に当りて宅地の
ぶ税を課せしかバ 当村の長林後久其弟三郎と共に鎌倉の
府に至りて 押領の地たりしを陳訴すといへども 貞時猶
ゆ許さずして 立に後久を打首せり 其後三郎も
異よりて大蛇数多出て往来を害する事甚しかりしかバ 三郎
ぶ税を許して其霊魂を慰め遂に三郎に命して当地に葬り
社を建て大穎明神と称し 社田若干を寄せ其害に遇へる十一
月八日を以て祭日とし 其三郎を以て神主と定といへり 以上延宝八年 林来ち出す

岩戸峡

此郷よりして半里許
鬱々として高き山
阻隘溪に一線の径
を穿通ぜしむ
雖朱暮霧の沢
岩戸峡の名ここに
起る


釜中
不動瀑布
瀑口三丈ばかりにして直下し
頗る壮観なりといへども
瀑下に至るにあらざれば
其全容を見がたし

孫起に幸社の西に小さき所ありて上に古き柏木一株あり是は
其首を葬りしといふ傳に石碑ありて奥津荒神奥津
姫神の文字を彫めりこれ奥村の名によりて後人の建しなるべし

石垣庄

荘並四ヶ殿志一座の末にあり十四ヶ村を総べ
丹生氏文に石垣といへるは此地なるべし

丹生氏文云
丹生祝伊賀豆之子孫石床石垣石清水當川教守連總長
麿身麿乙國諸國支麿古公

榑の森 丹生村にあり丹生神を祀る境内に榑樹の大樹一株あり周圍二丈
余根是れ切株より生じ蘖あり其幹株となりて抜擢
むかしは枝葉繁茂して大株の高さ連亘せり今其幹の大さ八九丈計
に経四丈三四尺ありて周圍十二丈許ありしを紀州家来苑院将軍令國寺と
號せられし時この榑樹伐りて天井板に用ゐらる今に残れり全國寺
にて伝へしこの木を伐て伝へし時に西の門戸を開きて枚を前殿と奥ひとよ

八郎山成道寺 糸野村にあり 浄土宗 法然流

明恵上人誕生の地と云卒都婆八ヶ所の其一にして
ち村に明恵上人誕生の古へ堂塔も整ひしといふ今寺邊の土地の
の地の像あり
字に寺地大門池などの名残あり延宝二年境内より約

佛の誕生日文明十八年に造る所の清なり又文亥九年の涅槃
会の由来記を藏む又明恵の状記に建仁元年湯浅宗光糸
野の内に後ちの後に庵の草庵を結びて上人を招きし
宗光の妻の為と加持すなどして曼荼羅供養の事など載せり

女瀧 糸野村の奥の六川の溪流にて道遊の地なり瀧ありて
水殊に清げし滑かなる岩に水岩寺海若しいふものの多くせしど
岩戸関 糸野より名草郡別ホこるる所山ありて岩を岩戸といふ
ち石を割りて新く志て此の道を開通せる所を岩戸といふ行人
魚ありしてこれを見るもの一筆の淡流瀬となり
して狩下り鳴き多く張りたるの地なり

釜中瀧 釜中村小名山田にあり
ありて壯観なり

天一神社 釜中村にあり株札に或は天日社とも記せり天日神命八重事
記に見えず孫の村依奉の三十二社乃中にありといへども僅
ドくし天一社と一社巡の社といひて地ほまま
知れる所なれバ天一天一社といふ方もまたあり

菖蒲嶺 眞松村の東にあり西ヶ嶺村と境にて山の
麓に大なる巌多くありて見と巌といふ

歡喜如來堂 西ヶ嶺村にありて歡喜の窟を塞ぎたる巌と瀬割
なりしに如来を祀るといふ府下よりも参詣多し

生石明神社 幸堂村より四丁ばかり十六ヶ村の産土社なり
此社あり境内に滞留することなし祭礼九月九日なり

白糸にちれるもみちを
ぬきとめて行きの
あとさへつゞくの滝
田中雪山筆

次の滝
石垣荘延坂村にあり

當社生石嶺の峰續にありて楢本村の生石神社と同じく大汝少彦二神を祀るといひ 楢本村ハ下ノ濱ニあり 或ハ又淨瑠璃に正二位宮にして阿波より渡りて八枚尾大明神といふ此神天慶元年正月十日阿波より人中尾藤九郎生石嶺に勧進せるよりも生石大明神といひ其後正暦元年社地今の地に遷しまゐらせりといふ 以上中尾氏系図

證るべき傳記と寛文元禄の記にハ枚尾明神と枚の木に降り玉ひ次神霊である
とも古人の口碑と併参考にハ

也し又ハ史官紀仁二年十月廿七日暑 加茂別雷社司言上
去九月廿日申時大風御寶殿前奉祝楊尾明神木口文尺
顛倒時被打破損舍屋等と見えたれバ知るべし枚尾神
の阿波よりよりて渡ると云ふ事ハ當社の傳へのしかしながら其名
草部府中村にもあり又當社の前に枚の大樹多し近年まで
数十圍の大枚ありしに船木に引きとりしといへり 枡上村

延坂村に往く別當を牀共 墳墓といふ
ちかいふ本堂村にあり

興善寺 同村にありて古く宗古義生石山觀音院と号す本尊古仏なり
縁起等今畧す觀音堂の額口の銘 施主しるして左に記すにハ

永享二年壬子七月二日願主丑年太夫三郎丹波国氷
上郡願皇寺庄 五社宮

烏帽子岩 中飯村なる境内に聳ゆる大巌なり形を以て名とせり又これより
の嶺をいひて生石神を勧請せし阿波の国人を祀る小祠もありといふ

次の瀧 又延坂の滝ともいふ高さ七十尺許といひ傳ふ絶壁の外に瀑中に比
其なかりしこの淵に鐵鎖あり旱魃に里人巖下の小祠にて雨を祈る時
此鎖を動ぜバ忽ち雨ふり来り白きもの見ゆることありて時にそるふらんと
いひ又其巖々に牛蒡茯苓
うすいと多く生ひあり

生石の神山より八峰八谷が流れて流れ合へる水延坂山ととも
ても瀬々をして岩の中を穿ちて流れて中より千尋の
底まで真逆にちからたかく見ゆる八十ばかりの隨ひをなむ
實に壮なし其響八谷をとどろかせて群山に轟き打ちおどろかせてふくろ烟
をも楓の茂みにさゝれりと降らせて紅葉をとのさ雲の洞を
おち積もるしぐれハ滑りかれ苔の緑を殆ど見せて其瀧に

て削なせる神楯千枚八千枚多くかさねたらむがごとく雲栖の姿雄々しくそゝりもたち次第にへられ来て淵となりて乱れ落むべしつる人すげ向尾にいたりて其の窟をそゝぎ更に深の苔に緑にそて岸に深口あふぶ竜を集へる又洞に入りて裡より窺はゞ毛もいよだちぬべし此瀧那智の瀧に次ぐをもて次瀧といふとかげにこの瀧を那智にほぐべく此瀧に次ぐ勝をならざれべし

延徳寺 名手村にあり谷を隔て生石峰に對ふ　境内に元亀三年の石塔あり

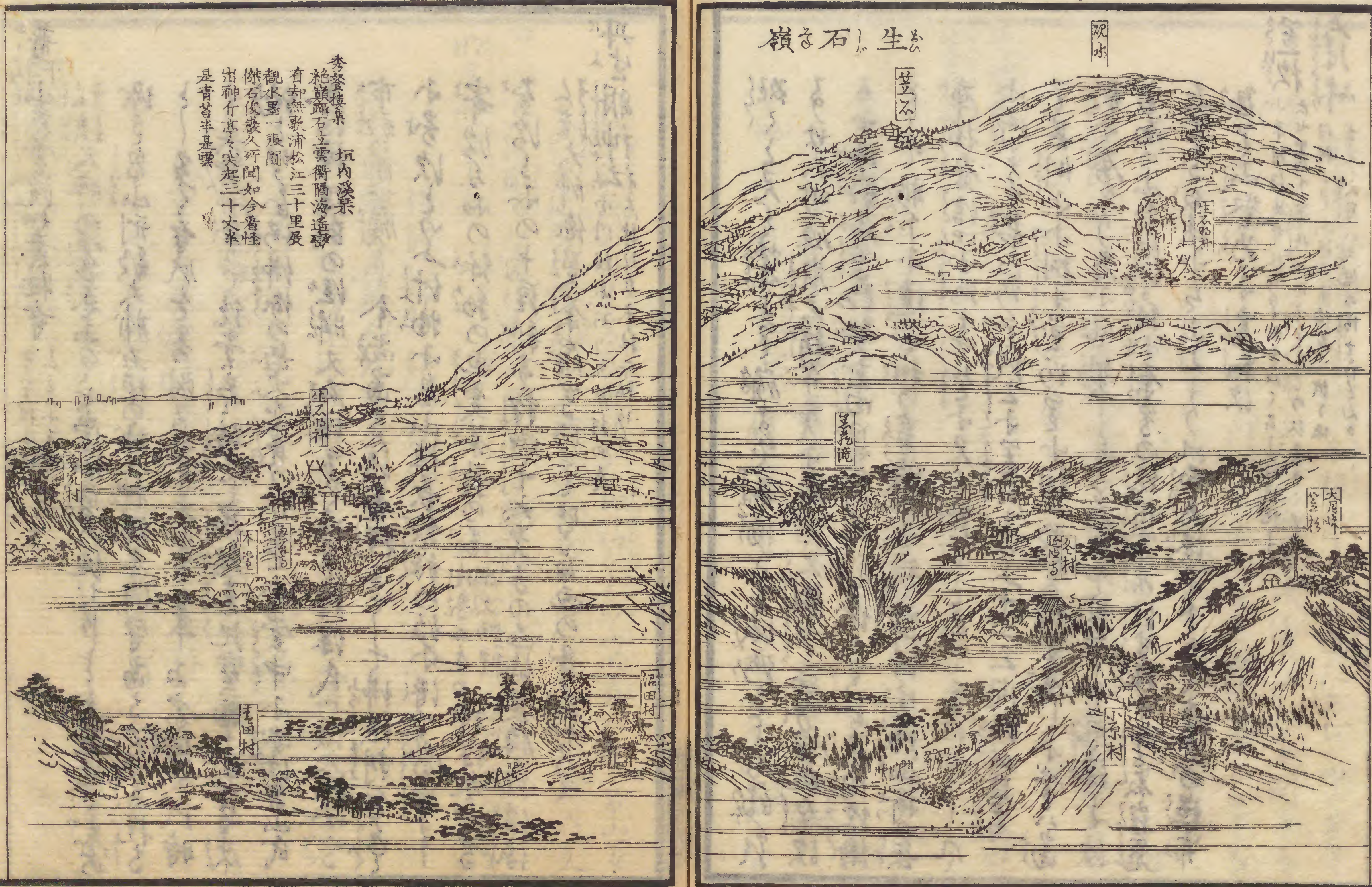
生石嶺 名手村の北の高嶺なり　紀続に生石峰といふ是なり　松茸あり

府下より望むに見ゆれ東南隅の高山にして龍門山と雲霄の際に比肩し龍門山も其形峻抜にして龍の雲に躍る勢あり生石嶺は其形雄渾にして扇の甍に似たる群山甚も然須頂といへども頂上に残雪あれ

踰てとみえて攀よりて嶺まで羊腸たる坂路をよぢ登ればば廿町餘山頂上稍平坦にして大樹せし四方を眺望に紀の海都名草那賀を目高の郡の地又高野山内緣郷として眼下に連なり和の葛城山金剛山河の生駒山摂の兵庫播磨淡路まで望みに見えて甚くも雲に懸るし風に御まて思ひ行はや比上に笠石といふ十二三間許の巨巌ありて其側に小祠小堂有り小祠は那賀郡に属し小堂は名草郡に属せり是に風穴しあり岩を透して風源とし次南面の山下に名村小原等の諸村数所次第に奇巌怪竃たる有り後に至て山上よりなれる湊て下りて千丈の瀑布

笠松 小未村福徳寺にあり尾をもて名とし此地より云七里の下笠松の内よりもこの松あるといふ　踏て山巒の不震動す

大月峠 日村より山保田荘楠本へ越る坂なり　大月ハ大槻の借字なるべし



生石嶺（おいしがみね）
硯水
笠石
生石明神
滝
大月峠
冬村
小原村
生石明神
本堂
沼田村
吉田村
秀餐樓集　垣内溪琹
絶巓龐石立雲衢隔海遥[illegible]
有却無歌浦松江三十里展
觀水墨一張圖
傑石俊巖久所聞如今看怪
出神竹亭々突起三十丈半
是青苔半是雲

普門山慈雲院如意輪寺

中野村にあり まへ条に出

弘法大師の開基にて七堂伽藍の地なりしとぞ其後鳥屋の城主鳥山刑部大輔石垣の城主神保参河守当寺を以て菩提所とし多く寺領を寄附せしに天正十三年ともに家滅せし時も兵燹に罹りて諸堂悉く焼亡し縁起並記宝物まで皆灰燼となる但仏像の兵火を免かれしを今堂中に安置す鳥山氏並に神保氏の位牌又石塔多くあり神保氏の後大和にある市郷の内に帰りし今尚当寺を以て菩提所として仏供料を寄附ありといふ什物に鳥山植長所持の経を得て当寺に寄附する所の弥勒の画曼荼羅の図寛永二年の神保参河守寄附する所の十羅刹女釈迦十大弟子の画像其他羅漢像弘法大師像曼荼羅等あり皆古画の奇品なりとぞ

丹生明神社

弘法大師勧請小門村にあり九ケ村の産土神なり 末社二社あり

田殿荘出村の丹生高野両神を勧請せしといふ明応八年鳥山万千代丸造営の棟札あり神前の鰐口にも明応八年丙辰乃文字試刻めり鳥山氏此時新に鋳造せしなるべし

明光山薬王寺

同村にあり上野山と号す 浄土宗 鎮西派 むかしは七堂伽藍の地なりしに天正兵燹に罹りしといふ本堂の仏中に存す九和年中

仏師僧珍源□総僧永源

内藏氏尼勝妙 紀頼孝女尾張

高如氏信頼 珍尾張則次女 伴氏尾張則□入道

嘉保三年二月十日 木□丈六寸 阿□陀如来

大極 藤尾張武忠 次尾張則家 同則元女 坂上氏

紀重直女尾張氏沙弥稼寂女尾張氏沙弥□

女尾張氏清原承道女尾張氏同延元同

永長二年□正月十八日甲丁汗

鳥屋城址

中井原村の東にあり 藁をもて造る 十八町許 東 九二の九三の九の次なり

巻當三代記云

永和五年二月十一日拂暁差遣軍勢於石垣城之處凶徒没落之由同日注進状同十二日酉刻到來云云

南北朝の時節中に此土も南方に属せしと見ゆれども其人の口碑絶ゆくとして事実絶て得がたし此城なども元は南軍の築きしなるべけれど北朝幕府と定められしに移り衰へしなるにや巻當三代記に據に山名義理が為に陥られて遂に武家の有となりけるなるらん其後鳥山左京亮大掾法師基国是を保ちせしが山氏の持城となりしに天正年中豊臣太閤のために落城せり

或書に天正十三年三月湯浅人白樫左衛門尉光業同志して大閤の使仙石権兵衛等攻落次長屋神保式部太夫吉氏降参次又武徳編年集成にも石垣鳥屋城を神保云々降参とありとぞ

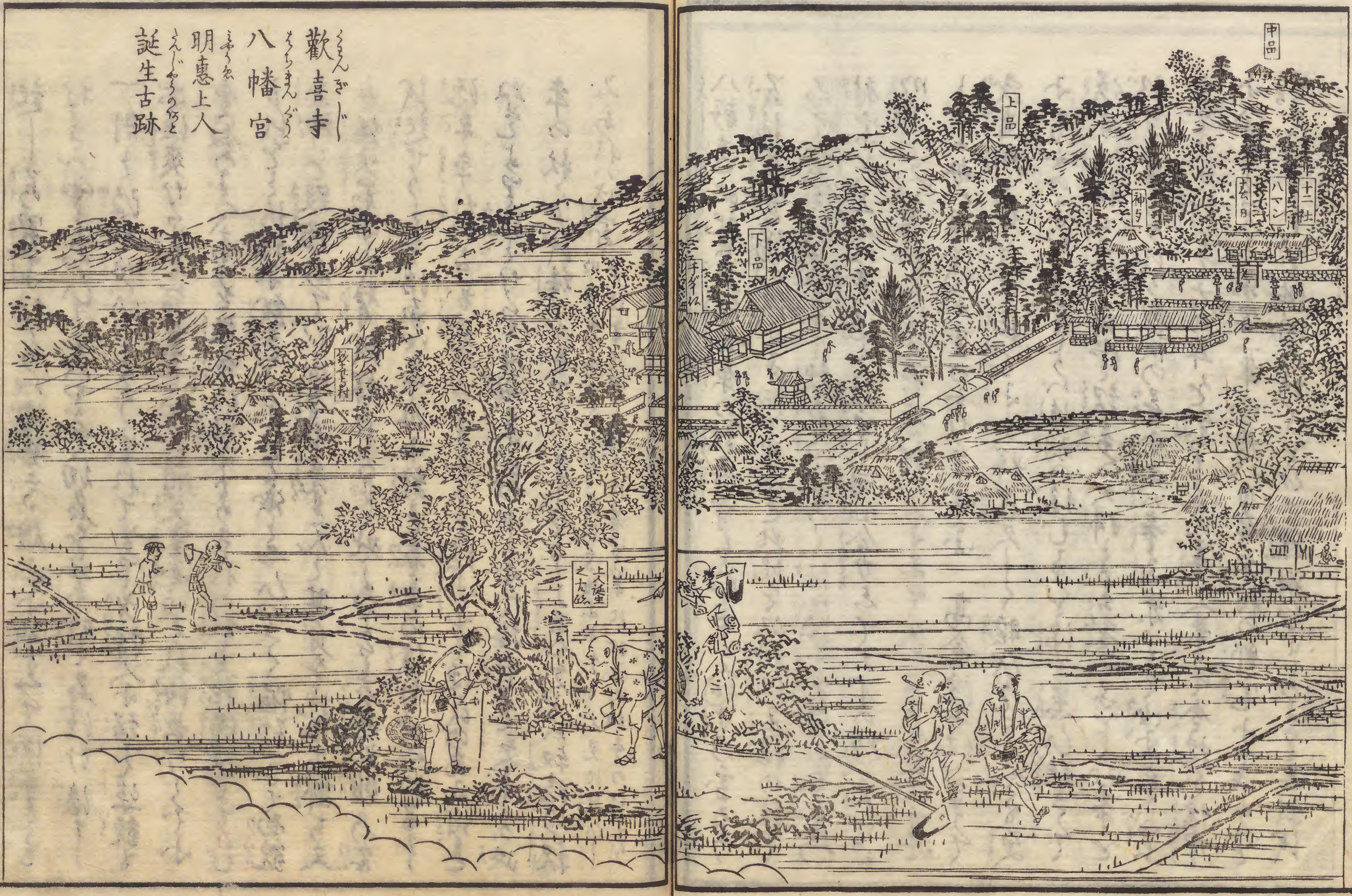
聖衆來迎山歡喜寺

歓喜寺村にありて上品堂は阿弥陀如来にありて中品堂は中のもの山にありて下品堂は本堂の側にありて不動堂は中央の山寺にあり新蔵の文書に建長七年沙門慈海寄附状永仁六年湯川某仏寄進状明徳三年寺執事文永六二年地頭源左衛門九寄進状延治三年宗猷淨林房へ云々此寺長禄三年讓状等ありて古くは梵宇も多く今の宗教の地をむかしは今堂宇境の迹ありといふ永禄の頃浄土宗となる

八町遠路紀云石垣吉原の歓喜寺ハ明恵上人経世の霊場なり義林房宣陽門院に申入り此地を以て別納不輸の地として一堂を建立し歓喜寺と号く湯浅宗光の二男左衛門尉對宗氏上人の遺徳を欽慕し同心合力して本の功を賛む云云

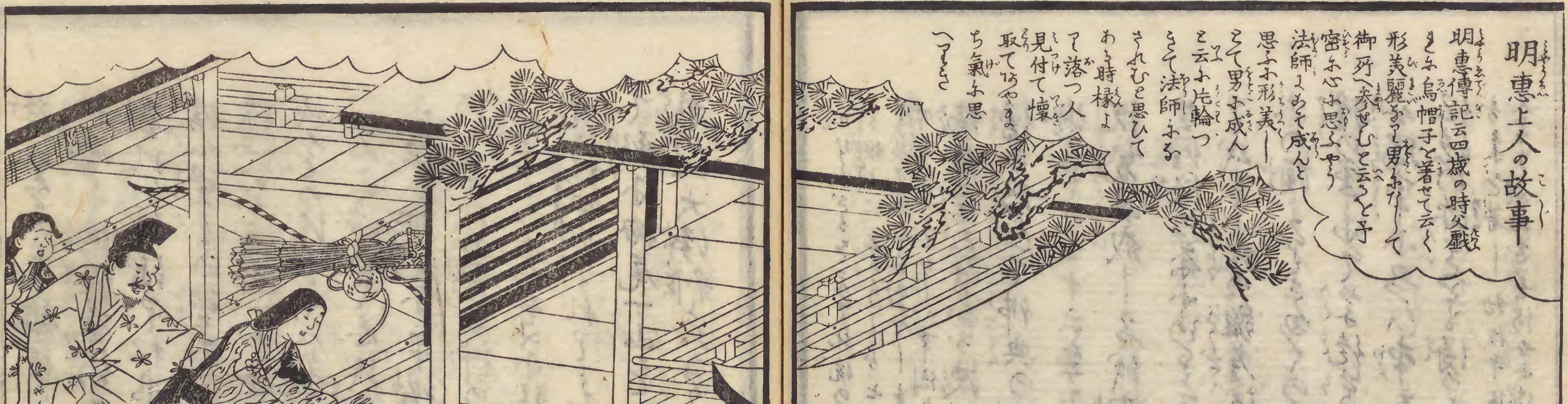
明恵上人ハ高尾石垣庄吉原村の人にして父を平七武者重国といふ母ハ湯浅宗重の女なりき重国高倉院に仕へ奉りて武者所となれりし然るに夫婦子なくて久しく歎びくるしみけるに男女の子なからましかば後嗣の絶むる事を深く患ひ歎きて仏像法輪ち及古薬堂に観音へ夫婦ともに多年一子を願むことを祈りまゐらせしが或夜の夢に夫ハ童子来りて汝が子とならむといひて汁右の耳を割さとらんと妻ハ人来りて金橘を懐中に入むとみて程なく承安二年正月八日吉原村の郷宅にて上人を生まれけるとぞかく仏因の深き志ありて結縁のよしめりと志賀城

歓喜寺（くわんぎじ）
八幡宮（はちまんぐう）
明恵上人（みやうゑ）誕生古跡（えんじやうのあと）



起し給ふ男子ならば洛西高雄山に登らせて佛弟子と
なさばやと思ひしがやがて生れて幼名を薬師と名づけ後に
一郎と改め呼びしが生れてより才操人に超え姿貌も
亦縁爽なりしかば九歳の時父重国討たれ母も亡くなりしかば小
叔なる上覚を親族の故によびされば既に窮通して
もれとく傍北に戯ることを識とせしひとく悩殺されて面貌
支禅を毀傷してかの源平を免れんと其身を地下に擲ち又
は燧火節中に習を蝶らしむれども此ようの不思議乃ち
を起せりとぞ治承四年母に離れ哀慕の涙かわくまなる
源平争乱の時に来て父重国も上総の国にて源氏の為に討れ
ぬ是より孤となりて伯母紀氏のもとにて撫育を受しが此
年の秋高雄に至りて上覚上人を叔父の親
みあれば氏室
本伝書に同じ 然るに著聞集に此上人初めて高雄山に登り上覚に従ひし時より

凡ならざるを見て北院の御堂に籠りしを文覚上人見給ひて己が徒弟とし
高雄山に登りしが七八人の食料を一時に喰尽し二三日が程も山中
に籠りて若学せし事を載られたり明恵と文覚と
師弟の契をむすびし事諸書に載せたれども皆ここに略す 後に縁を結びて小入て先倶舎
論を学び其余が読誦せる小乗経論を暗誦の
僧に随ひて佛典の深意を求め思ひを日夜螢雪の功をつみ
勤らしける十六歳にして上覚に就て東大寺の戒壇にて
祝髪具戒し名を成弁と呼たりしが後に高弁と改めたり 寿永
生得の禅僧に似て宣旨小倉の鴿窮に苦しめられて其知
見或は小蛇の雛を其谷むしられを知りて遂に去しむるなど
さいの頭より色々の奇特多かりけり建久年中華厳宗興
隆の事にて学徒等の本論を起し高雄山栂尾に遊ばせしかば其の
無端事に思ひ本意のかく文珠菩薩を頒つしならんとて
仏法の深意を得めとて其の事を求し 上人貴風流を嗜れし
哥集を著し勅撰哥集にも詠哥を載られたり 又や自遺心集といふ
又書を著し其の哥集に編中にも瞑宮一帖に収めり 自佛像を


明恵上人の故事
明恵傳記云四歳の時父戯
れに烏帽子を着せて云く
形美麗なり男になして
御所へ参せむと云るを予
密に心に思ふやう
法師となりて成んと
思ふに形美し
くて男に成ん
と云に片輪つ
くて法師になる
されむと思ひて
ある時椽よ
り落つ人
見付て懐
取てなやま
ち氣に思
へりとさ

背にしたがひ高雄を出て遂に有田郡須原村の後背なる白
神峰に修禅苦行の草菴を結び樹下石上に露宿して嵐
に心を練り松風蘿月に静坐して観念の思ひを凝し
信心堅固の誓ひとて右の耳を割落して佛に供じ猶も
猶此を得んとて深く遊心修習したれども未だいたるべきにあらずし
僻遠の地なれば文籍に乏しくて学業の便りなければ又
一度上洛して志を果さんとて高雄に登りて文覚上人の勧
に随ひ栂尾に卓錫しけるが又高雄山澄観の跡え
行をなしけれど再白神の峰に帰りて更に又石垣庄の山奥に入り庵
結ひて以て身を又に移住しけりこれ上人の叔父なる湯浅宗
光が請申によれりとぞ 建永年中 後鳥羽上皇院宣ありて
て彩に栂尾一山を上人に給ひて高山寺と号し無流盛
厳の一大浄刹となりぬ其後寛喜二年冬より病に

そみくゆるせしが同四年正月に至りて終に危篤に及びけり
既くより経写の終りを知りて既に入滅に臨みければ佛祖涅
槃のかたちに倣ひ身を右脇にふしして手を蓮華拳にて組み
微笑莞爾として眠るがごとく寂滅しけるは時に享年六十
なりしとぞ 虎關が賛に中世以来賢首之宗不振矣辨公
以純誠之質立鑚仰之志故毘盧華藏之海廻倒瀾普賢
毛孔之刹復侵疆見其雅操之激勵亘乎中興之才器也豫
章從小有棟梁者辨之謂乎 とありてそれ佛典に功ある
事はいふもさらなり世人を教化せし事いはまくはるが中にも
北條泰時を云ふに論し済世安民の要旨を授奉りしは
平絶におもひしるべし

大日本史云泰時在京師謁栂尾僧高辯恥法
偶及治國之談高辯曰君不見夫治病者乎良
醫能察其源審寒熱之所中然後投劑莫不立愈世之爲治者
不察其原濫行賞罰則姦偽益作風俗日偸欲爲之治未由也
已譬之庸医不知病之所在妄施治療治之不成由人有欲心
欲心一萌衆禍競起足下執軍政躬自率勵何不成之有泰時

曰雖一人勉行之奈衆不従何曰是不難在足下之心耳古人有言曰其身直則影不曲其政正則邦不乱正也者無欲之謂也足下心誠能存之則人入薫徳而知足不勉行治可庶幾矣一有争訟者則自反而痛懲不可加罪於彼譬如身不正而悪影曲不正身而欲罪影其可得乎恭時大感悟常謂人曰我備之執権護免罪戻高辯之力也　後鳥羽上皇建礼后も受戒し玉ひし事或ハ秋田城介が尊信の深かりし事ども有りて高山寺に住せしなど其化さかんの事跡は印本明恵伝記及一本明恵伝記に出たり又上人の名望洽く呉域中まで及びしゆゑや纂古録十一巻忠節編日本明恵上人の略伝を記せるよし元亨釈書和解の注に載せたり

○世に伝へて建仁寺栄西和尚宋より茶実を携へ来り帰りて始て筑前国背振山に植又其余種を明恵に贈りて栂尾に植ゑしむといへり然るに虚巌が大典所作の茶湯記に建仁寺開山千光国師栂尾明恵上人同船入唐持此種来筑前背振山栽之号岩上茶上人移之栂尾又移宇治（始名所号茶に栂尾明恵上人呉国より茶種を得て背振山にうゑこれを岩上茶と名づけて又より宇治の辺去茶園に下るなりとてこゝに栽とありて是氏茶湯記乃ゆゑありしに徴へるならんべしすべて近世地誌のるいひかでる杜撰いと多し）とありしとも伝記にも建仁寺僧正御房大唐国より持渡りて給ひける茶子を被進けると植そだてられけるとありて栄西より茶実を伝へ来りし事あれども入宋の事続書に見えざれば疑はしき事説なりされど是より栂尾山の茗園日本に名たかく甚名高く呉域に伝れりて酒茶論に西斎詩話を引て曰寿上人田自日東以其国所産梅山茶見恵賦詩謝其詩の略に云幸得梅山信初嘗日本茶とありて又茶山とも呼びて龍巌集曰梅尾産佳茶而未知其山名及閲清拙和尚同夢窓国師遊梅尾詩始識古呼為茶山其詩云幾重峯転又谿廻行到茶山睡眼開とあり其後栂尾山茶樹ならびなく絶て宇治の茶苑独世に盛なりて摂本邦にて喫茶の行はるゝ

東晩く弘仁の頃に始まれども幽香清味甚しく絹織にのこ
傳へて菓種も久しく世に絶果たりしを榮西及上人
茶菓菜を中興し人間久来の渇を醫さしめたまひ
弐上人の勝跡なりけりや
序にいふ藝苑日渉の説を按ずるに梅山は即栂尾なり梅の字を
もと 官王人の製せし字にて彼古は未だ世に行はれざれば梅の字に誤
認しならむといへども幸に傳ふる所の古文書みるに上人在世の頃
の栂なるに既に梅尾と書せりてれに栽せる源字文にても知るべし
按ずるに梅尾栂尾同じく二名にて並べ書る梅尾といひ後に書る梅
尾と云るなるべし 高山寺記を云中に云明恵上人より此流院へ奉りし文書の案文高山寺は梅尾と申名るを近頃都賀の尾と申とかや又文治の年号を出付る古き文控の記せにも梅尾坊といふ上で此地書が畑といふ大名の地なり據まで、もとは毎といふ地名なりけるべし

施無畏寺蔵嘉元三年文書

よしもちのひらそまきさ志ハむ光
めちものしやう人此流をこゝじきん
是やみちたとるにまちて

明恵上人誕生地 寺の傍の畑中にあり周十二間の芝地に梅を植て石碑を建てり梅を近年植たり
河なる庵湯井 袷衣塚の傍にあり 袷衣塚 碑の傍にあり

石碑銘

普賢菩薩 上人誕生之處

兼安三癸巳正月八日辰時 嘉禎二年丙申 十一月十八日

比丘然海謹記

八幡社 歓喜寺村にあり 祭礼八月十五日
勧請の時代詳ならず弘安三年岳清太郎宗春比丘尼心恵が
田寄進の文書一通を歓喜寺に蔵む又天文十年岩万寿丸再興の
棟札あり椿社春日を明恵上人崇敬ありし神なりと云て祭

るといふ十二所權現を祝れるに永享八年大檀那金丸氏紀丞
光俊延德三年大檀越右京亮當寺納慶珠泉といふも
二社とも同寺の鎮守といへり
錢立山 鉄森寺村の南にあり麓に建久寺善哉院といふちいさき寺あり手跡
て揃ふ合崩壊に及び苔畑とされて碑碣を多く見えずやるも
文字分明ならざれども中に應永四年同六年等の文字見え
えらるもあれおわりいま文字全備せるもあれを左に挙ぐ
明恵上人建久九年秋の頃高尾騒動の風聞によりて爰に
白上に構へ給へども猶人里に近ければ樵夫の聲も宴あり
峯ちかくて禅定の勤いさゝか障あれば湯淺兵衛尉宗光が沙
汰として石垣荘の奥人里を去ること二十町許に一宇の庵
を構へ上人を招請しあるじ業を絶へて是を錢立といふ
後に錢立山巴里おそ南室の嶮峨として獨鈷滝く左田川
をらみ川を隔てて白山をのぞめるに畫屏を立てたるが如し云々
と八所遺跡記にみえたり又傳記にも此地のさまを載たるも

碑銘
功德林菩薩

建久末比製
華厳唯心観
行式并随意
別願文之所

嘉禎二歳
丙申十一月
十八日
比丘喜海謹記

子安地藏堂 西丹生図村石ケ谷にあり園に大石あつまりて叢に高き桂山
名石寺といふ浄土宗の寺あり是より東へ三町許に
して堂あり竪横とも一丈ばかりの自然石に地蔵尊像を
彫付たり世に子安地蔵と称し平産を祈願する者多し

御霊社 東丹生図村にあり
三村の産土神なり

垣倉 庄村に隣れる村名なり擬ふり垣を額の偏字なるべし額を稲の穂とい
ふなり庄の収納の額をつかぬる庫ありしより地名とよばれるなるべし
額倉の名東大寺
古文書にも見えたり

平等寺 垣倉村乃西北の字に於きて或書に京毘沙門堂の縁縁を引て
平等寺の所に紀伊国石垣庄といへる此地平等寺の旧なりしとの事
寺を遷おき
しるべし

池崎宮社 同村山上にありて眺望よし
鷲巣池等眼下にあり

若宮八幡宮 吉見村の発家の谷といふにありて境
内山林周四町許祭礼八月十五日

古墳 吉見村中にユクワントノ塚といふ所ありて古き石塔一基あり梵字二字
を鐫てそれ又村の端なる妙見の森にも同じさまの石塔あり

松廬遺稿
記遊短古 本集三首 今節一首
野呂隆訓

巖下何人墓邑民稱親王堂帝者子華旒一吹梁春夢浮雲断朽骨風吹霜青史名不載遺恨鎖夜堂墳上参天樹翠栢老有香悵然摘潤蘩把泉薦幽芳貴者共賤者百年共茫々身後一摘涙豈如酒三觴咄咄憂何事烟霞味獨長人生行樂耳徃莫及夕陽

自註云吉見山中有吉墓邑民傳云葬吉見親王然載籍無考蓋疑南朝諸皇子竄匿而終者也

御霊八所宮（ごりやうはつしよのみや） 広村に河瀬四ケ村の産土神にて祭日九月十六日神事に〔illegible〕渡御行り 社前の〔illegible〕場所は〔illegible〕にて鎮く〔illegible〕旅所とす

本社祀神八坐（ほんしやしじんはちざ） 吉備大臣 崇道天皇 他戸親王 井上皇后 藤原大夫人 橘大夫 文大夫 火雷天神

此地（このち）古え凋落（ちやうらく）たる原野（げんや）なりしかバ時（とき）の領主境内（けいだい）をひろくしめて當社（たうしや）を鎮坐（ちんざ）せしむるなるべし傳記（でんき）ありとも後世の書にて古の傳まよ考（かうがへ）がたし元禄八年吉田家の傳奏（てんそう）にて正一位の榜額（まがく）ひしろく正一位御霊八所宮と書せる額（がく）を掲（かゝ）げたり小川（をがは）村乃丹生（にふ）社を上宮とし當社を下宮とし祭日小川の神輿（しんよ）渡御（とぎよ）あり 御霊といふ社諸國に甚（はなはだ）多くて祀神さまざまなれども大概讒（ざん）にあひて冤死（えんし）せし人の霊を祀れり然るに古書に八所御霊の目あるを以て後世御霊社といへば祭神詳ならぬ社をも八所御霊とし其霊の事ともなほ次第社もふえて八坐の霊を祀れりや今猶へいへり

産物肉桂（さんぶつにくけい） 石垣庄中にも多し就中（なかんづく）広村の野辺（のべ）よく繁茂（はんも）し肉桂以て製（せい）する事他村に優（まさ）れりと云ふ里人肉桂のしからば金柑生薑菓などにも用ひて

此樹（このき）蜜柑（みかん）に次（つぎ）て野中田畠山野に蕃殖（はんしよく）し其氣溪谷（けいこく）に溢（いつぱい）れり其始（はじめ）何の頃（ころ）にか石垣市場（いちば）村邊（へん）に島（とり）の糞（ふん）より生じたる香木やゝ生じたるを土人（どじん）緑和（ろくわ）に皮を剥（はぎ）て蘭若干の賞（しやう）を得しより始めて肉桂の利益（りえき）ある事を覚り其根の製法（せいはう）をも習ひ得しより文化の頃よりも近郷（きんがう）にも多く培養（ばいやう）して終に一種の産物となりぬ文政の末より天保に至ては山繁を家毀し地を拓（ひら）ひて一時に千万株（ちやう）を植て続（つゞ）いて〔illegible〕せしかバ價（あたひ）やゝ下落（げらく）し是より以前に較（くら）ぶれば其益少

庄邑御霊神社
石垣荘中にて多く肉桂を培養す就中庄村の水土能その樹に應ずるものにて繁茂他村に倍せり
本社
イナリ
庚申
弁天
皇居石
不動
神主宅

荘中村々にて肉桂をとりて薬品に製する図

其二

しかれども大抵年々万合になるといふ其製法を問ふに
年々三四月木の芽萌出る頃に十歳以上十五年許経たる
幹を伐りて其根を残して水に浸して是を去りて婦女等
槌をもて搗ちたゝき皮を剥ぐといふ

那耆野

日本紀 持統天皇三年秋八月辛巳丙申禁斷漁獵於攝津國武庫
海一千歩内紀伊國阿提郡那耆野二萬頃伊賀國伊賀郡身
野二萬頃置守護人准河内國大鳥郡高脚海

毛祇尾山深汲院大乘寺 下徳田村にあり浄土宗

寫泰令戒光明寺法山上人は洛東黒谷の一世にて法流に
名ありて永禄十二年熊野に游歴して當郡宮原の郷に錫を
留めて其宗門をひろめむと此頃ま鳥山尚政が臣に文本令
助といふものありて深く上人を崇尊しられ保りて尚政を勧

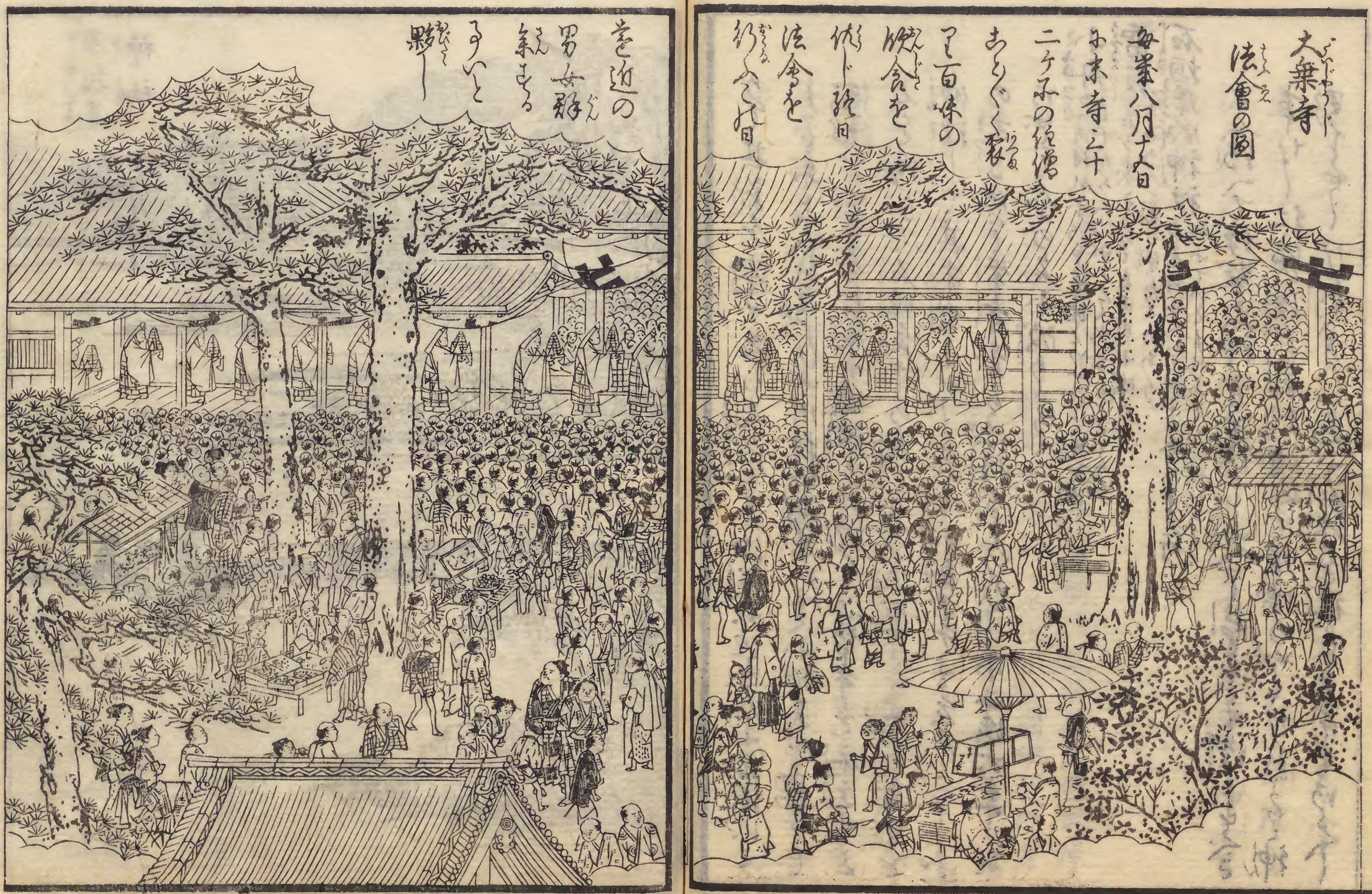
めて其義を奉ぜらしむ尚政の弟深政此地の庄に石城を築きて
また上人に歸依し小川村の鳥居の前に頻に請ひて
法流を汲ましむ遂に尚政と共に深く歸依し當寺を建立し上
人を請ひて石垣庄中の真言宗を改宗させ或は廢寺を
修理して其末寺とせしが今に至りても庄中二十二箇
の末寺ありて當寺を源性寺といひしに正徳六年
ありて今の名に改めらる

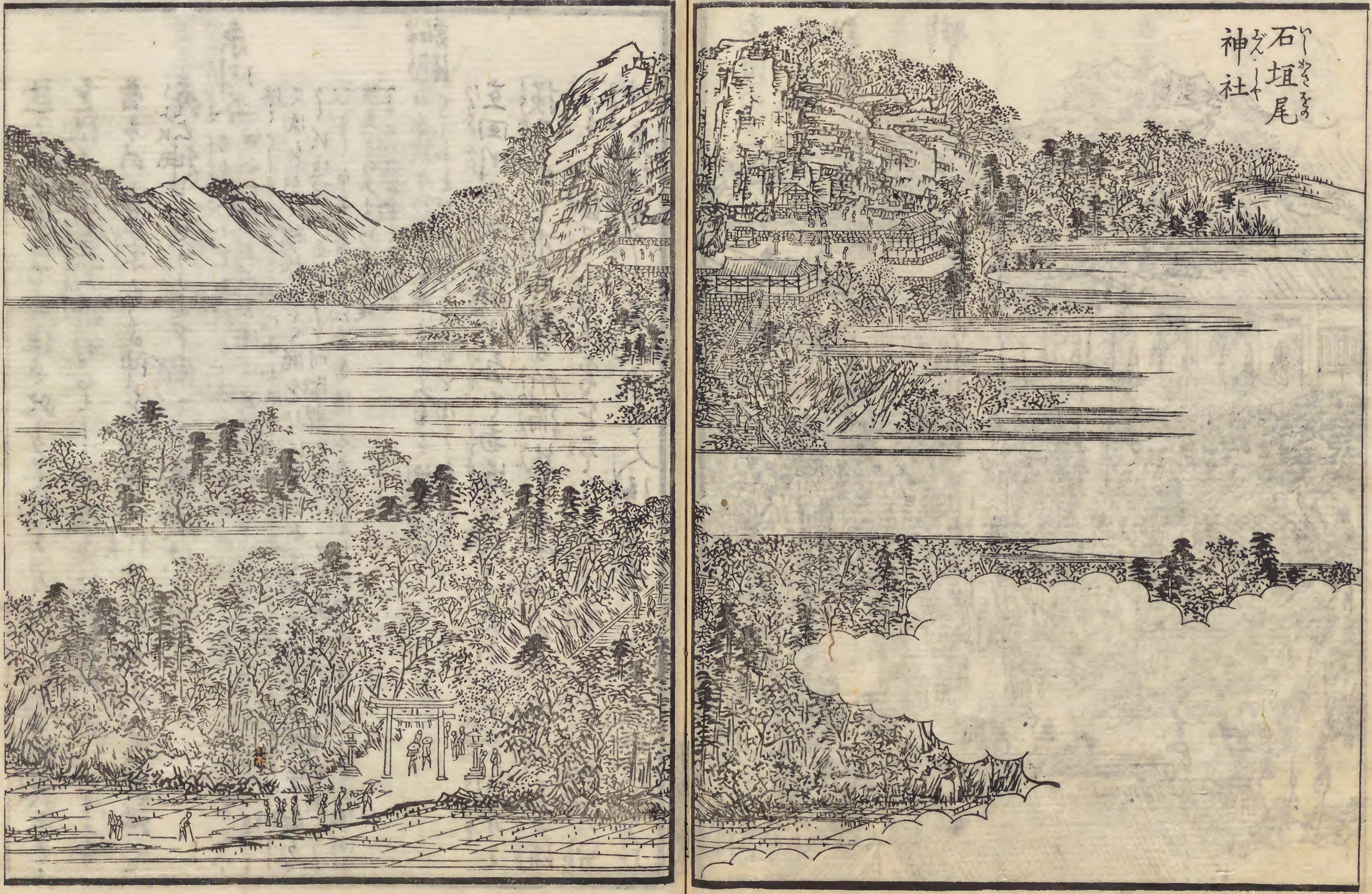
小舟池 同村にあり寺池といふ池と堤を隔て大池にして水多く溜りて田川に灌る

雷石 岩が嶺にありて大石の聳たる所あり

石垣尾明神社 吉原村にありて村より登る事三町許にていとおほふたる社地あり

古人傳へて伊勢大神宮を祀るといへり然れども定かならず
本社社地の瀧巨巖列峙して垣墻のやうなれば神
號とせしなるべしこれは直に石神を祀れるにてもあるべし


大乗寺
法會の圖
毎年八月十八日
小末寺三十
二ケ寺の住僧
あつまりて
百味の
飲食を
供じ終日
法會を
行ふ此日
遠近の
男女群
参する
事いと
夥し



国立公文書館
National Archives of Japan

其ならび无名の石垣あり此よりて起れるならむ当社は古へ荘中を総べての産土神なりしに後世地頭各所にありて各その尊崇せる神を領地に祀りて自邑民みな其神を産土神とせしよりて漸くに衰廃せしといへり

糸川谷

吉原村より東南別に一渓をなす即此渓なり渓に入る事凡二十七八町にして南山谿澗次第に其間ますます一帯の小流伸往よりて来りて深くして若に有田川に合流せんとする所に至りて一大巨巌嵷起して流を支へ激怒して瀧をなせり其上に深潭あり経一丈許深さ測るべからず近村あるひは旱ある時は潭際七日にして壮者を撰びて潭中に入らしむもし白魚を見れば雨を得べし見ざれば雨ふらずといふ又潭の中に蝦石といふものありて晴るる日は此石見ゆるとぞ

鮎瀧

松原村にありて又大瀧ともいふ南を修理淵といひし水を松原村とは此瀧と謂て相対せり

有田川の激流此に至て両岸相挟り更に又大巌川中に横りて出て中央缺る所纔に甚とまして一丈許に及べる急流あまりに急にして白浪雪をまきさ飛沫霧を飛し激怒の勢神鬼を驚かし雷吼のごとく人語を弁じがたし此より上流に舟揖通ぜずといふ此に一大奇観あり二三四月の頃より寸許の香魚上流に遡らんとするもの潭中に雲集簇擁し千万群をなし相競ひて激流を逆のぼらむとする勢ひうちあげられて一躍して瀧を離れて半数は迴流の中に入る其疾き事矢の弦を離るるがごとし漁人其潭に集る時を窺ひ大なる攩網を入れて是を捕る多き時は一挙に一斗許を得少きも七八升に下らず其頃僅に一両日の間にすぎず且妄に捕る事を許さずとて是を近の郡官其時を窺ひて漁より上舟より見る群衆して両岸雑沓を成す地なり

岩倉神社

粟生村にあり四ケ村の産土神なり祭礼九月二日流鏑馬あり

有田川の上流社前を流るる川中に霊巌ありて高さ六丈に余まりて社名の岩倉これによりて称ふ倉は嶽といふに同じ社会の傍に見ゆる社をも岩橋其といふ四村川の奔流南より来りて此に合流し次南岸相挟りて聳よ

松原村領

玄原瀬
船くみの図
修理川領

粟生村
岩倉神社
泉石の勝景

又岩に一片の桜を擁へ橋に換ふるゝ森蒼たる水に耳を穿ち苔を漱ぐ限りなき幽邃の地にして玉田川の風致これを第一とするも可なり

山保田荘

峯瀧（いもぜき） 玉田川の流に沿うて高さ五丈余の瀧あり

右地は荘の東に連なりて二十六ケ村をいふ此荘高野の東南に続き大和国吉野郡に接し四方連嶽環擁して村落多く川の左右に傍ひ或は谷に散在して山保田といふ九ケ村は下流の保田荘に対して山保田郷の名あり

阿氐川荘（あでがはのしやう）

東鑑 東鑑に見えたり

元暦元年七月二日下紀伊國阿氐川荘可下早停止旁狼籍如旧為中高野金剛峯寺領上事

右件荘者大師御手印官符内荘也而今自寂楽寺致濫妨云云事実者不穏便歟御手印内誰可成異論哉早停止彼妨如旧可為金剛峯寺領之状如件

是より後つのころよりか湯浅氏をもて此地の下司職とせり又建久八年僧文覚高野山文書に此地の下司職を湯浅宗光に譲ることみえたり

高野山文書

自鎌倉殿安氐川下司職を文覚に給ひて庄也仍云濡敷に令濡進天王寺并に高野山大塔之料事左右執達可下令沙汰給上彼由下文令進之候云

十月十三日

七郎兵衛尉殿

文覚

丹生神社（にふのじんじや）

二川村の産土神なり祭神丹生明神

光明山安楽寺（くわうみやうざんあんらくじ）

二川村にあり真言宗古義なり本尊薬師如来又大般若経の古写本を蔵す寺伝にいふ六百巻の内二百巻を花林寺一切経内にも此の写あり又寛治五年の跋あり沙門行心結縁経師僧源を書す又境内に破損の碑あり

丹生神社（にふのじんじや）

江川村にあり村の南江川村にあり当村にては小社なり

大永八年戊子修造の棟札あり其文に奉棟上丹生明神御地頭高野山奥院宛十二紀御宿老とあり又当社古写の大般若経二百巻を蔵む今猶六百巻を当村及大谷二川三村に二百巻づゝ分ち蔵むといふ 当社蔵むる所の大般若経第十巻のおくに此経者是書写沙門行心一切経内也而為結縁一釈そ寺従経若

二川村よりて楢本村に
うつれる乱渓泉石の
美観實に仙境といふ
べし故に穂川村と
はよふなむ寺院の
いらかひつゞきかぎりなく
市氣ほに消盡ん

うみをよられ
岩井に水は
よれ中れ
ちりちたに
ちる名ね
かく見なり
あり

水崎久道

之奉レ書秩也とあり又手写状書にありて寛治四年
庚午十二月とありいづれの世よりも此時のものなり

産物火縄 三瀬川揚川の二村にて鉄炮の火縄を製す二村とも本川より南の小渓なり

御そぎ川 今の三瀬川村の小名なり日物川村の南の小谷に御曽喜権現社あり

四村谷 本川の南の渓にて中東河合二俣小松川の四村此に属る

大滝山善福寺 中東上村にあり古義真言宗なり当郡の中瑞あるにて綸旨院宣寄附状なども多くありしに天正の兵乱に焼亡せしといへり寺二宇あり

河合滝 中東河合二村の境にあり飛泉其高さ数十丈落口升形に似たるを以て升形の瀧ともいふとぞ

大梵天王宮 河合村にあり神主小川氏の祖九市鷹といふ者勢州多気郡手小川村より出て小鳥家に属し去る戦功ありて采段文書を頂戴村に移居し此社を造立し子孫代々農民となる小鳥中納言四條中納言南正成等の感状等に書物数巻を蔵めしに享保十八年火災ありて武器文書古もく焼亡せりといふ

白馬山 生田村にあり二郡に跨りて特起せる高峰なり修理川谷又ハ四村谷等より登る事又十町許山上より日高の御坊並生田岳海の海迄眼下にあり

鈍白瀧 落川杜銭谷にあれども白馬山の半腹にありて高さ三十間の絶瀑にして二重に懸る難路にして至りがたし

観音堂 楠本村にあり黒村中に慈恩寺といへる古寺ありしに兵燹にかゝりて廃ちしとなれり其後観音堂を此地に移せりといふ什物に大般若経

の古写六百巻あり其内百巻の裏書に右大般若経者当国石垣庄成道寺之御経也然永享十二年蒙諸方化縁之助而直銭十貫文買得之則修覆之奉寄進楠本慈恩寺云々勝慶庵住寺とあり巻中に康和天永天養久安大治平治弘安正平正慶天文等の年号ありて其以下帝王の跋に平治元年己卯始自六月至于十一月求之集所々之古経一部六百巻奉修治書写于願主金剛佛子禅助とありて書躰見くさく聞ゆれども多くは執筆のと見えてまぐれて二川大谷日物川等にあるよりえしあり甚中務失せしも多くあるよりて或は抜本或は写本をもて補ひ寛文年中其柚を杉本としてあるよしと裏書にも見えたり

銀雲瀑布 楠本村の字銀雲といふ所にありて万壑重畳して嶮峻阿高く飛泉岩の頂より数千仭落て其声雷の如し渓峡して其下流まで至りて瀬を成し上流を見上れば下流見えず下流と岩より上流見えず左右に渉りて一とかれども更に得て其流ハ見がたし

産物棕櫚皮 山保田荘中津村多く棕櫚をうゑて春秋其皮を剥ぎて諸国に鬻く年々の利益少からず内挂に次ぎての産物なり

生石神社 楠本村の西にあり

当社は生石の峰より東十町許の谷にて地ごと浅芽が中に東の横むらの小嶋く生繋りて谷の畜跡の多着も吹きふ糸物き神垣あり社ハお殿にて大汝少彦名二神を祀るといふ其後方にこの横むらの末よりもいとみさく

国立公文書館
National Archives of Japan

天窄てたゞれ奇なる巖あるを即生石神と称ふ巓の半よりて崩れて節あり二つの石擁さあひさらんがごとし其高さ十六丈幅四丈回許なるべし谷にのぞんで岌多ある石をも其形ちを頸を傾りて此石神を守護するに似たり里老の傳にむかし楠本村の里人ふとり怪しき夢を見て救ひあるを請に依て山上に攀登て見れバ此石神一枝のうちに天降ましまして坐し給ひと寺僧来りて人々に加ひて社を建てしと云へて按ふに生石の文字神名地名又氏にもみえたり霊石ぞ称へたるなるべしもろこ万葉集に生石村主真人が歌に大汝少彦名の住まれし志都の石室ぞ幾代経ぬらむと見え國史に斎衡三年大汝少彦名の二神の霊二の怪石になりて帰ぞるよしある事などあれバ當地の石も二神を祀れるなるべし

明王寺 沼村にあり鰐口の銘に應永廿年西山寺鰐口とあり西山寺ハ當村の山上にありしが今廃せるをもて當寺にうつしおくといふ

遠井辻 壺井村の傍にて那賀郡野上荘上井村へ越ゆる嶺下よりの縁説温泉在るなり

醫王嶽 同村の東大谷の中にあり峰を起せる嶮嶽にして岩茸多く生れども嶮岨にして採るもの稀なり巖下より清泉湧き出づ

勤閑 三田村の内左田川の河流にて高さ丁丈許の瀧ありて氏神より上流にて鮎の上る事なりかたしに至る数ありて岩石稀に礙し逆に今此處に滞ぞといふ

藥師堂 三田村下谷にあり

鰐口銘 貞和二年二月那賀郡岩手荘西村極樂寺鰐口

宮川 三田谷の奥にあり當村人家より上も社多しこれに流るゝ川の名なり西の荘なる宮子川の三村の大名なりいへる寺の末を以て宮中にて流を

清水 此所にあり寒けくれ地といふべし龍神におくるゝこの地よりて下湯川にあるを執りとし按ふに丹生の氏文に石底石と当川などみえたる不清水も此地なるべし

八幡宮 新井村にあり六ヶ村の産土神にして社殿も備はれり祭礼八月十六日うけ馬ありて神輿は亀田大塚寺附の方にありてお當寺学流といふ

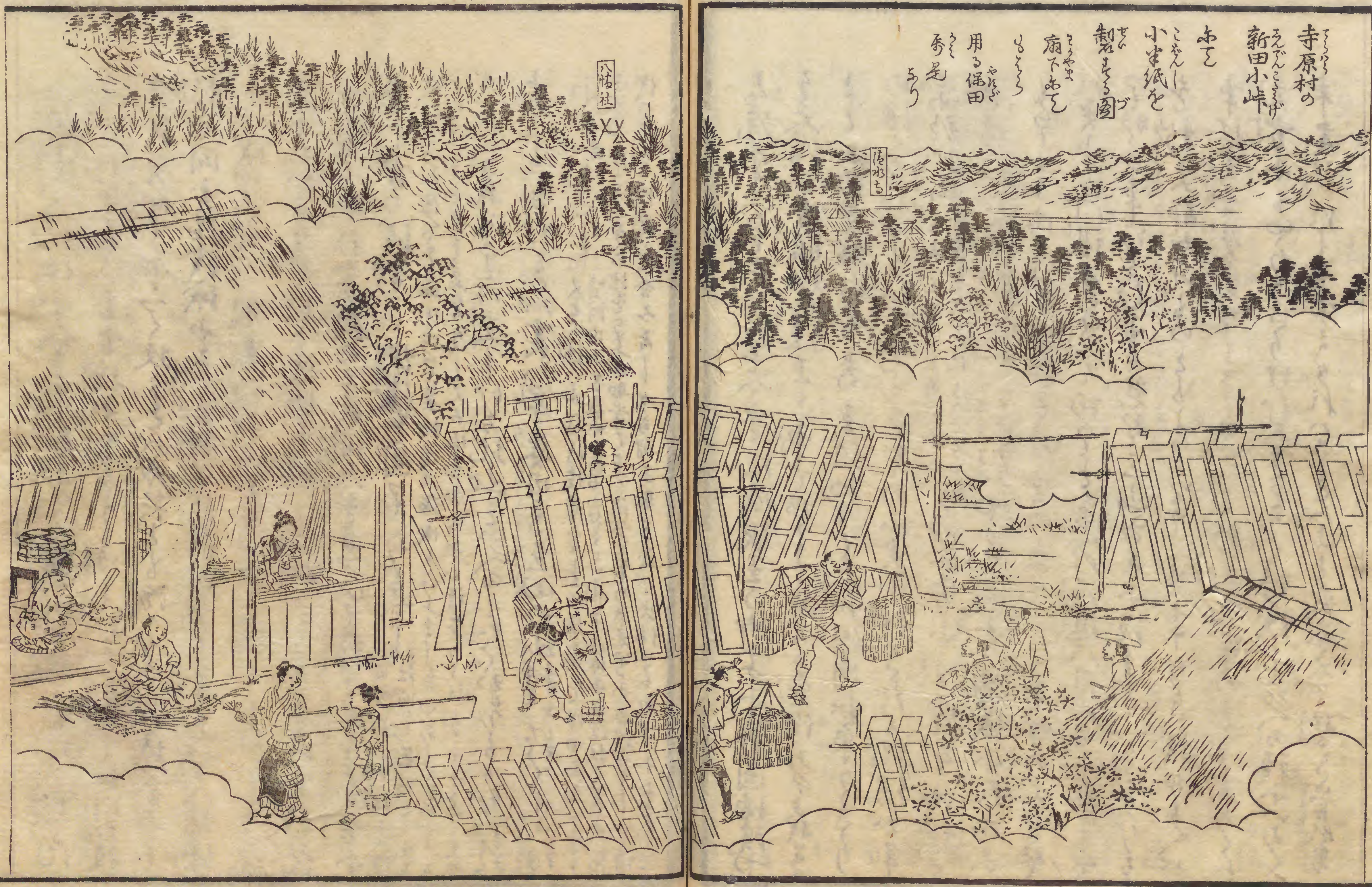
高倉杉 社前にあり杉の大樹にして門の形をなせり二樹ども三抱に余れり

阿瀬川城址 同社の山上にあれバ八幡城ともいふ在手氏此地にて城を拾ひし去れり

阿瀬川も左田川の古名阿呈川を流れる稀にまで既に古書

二年那賀郡猿河までの変分状に阿瀬川と見えたりされど中古
よりて下流を玉田川と称すれども上流ハ猶古名の阿弖川又阿
瀬川ともいへる事古文書等に多し此城即阿瀬川湯川合流
の地の山上にありて故に阿瀬川城といふいだきの時築しなり
詳ならざれども中古湯浅氏此辺の地頭にて其裔孫六人道
定仏元弘年中（或ハ元徳年中）河内国赤坂城を守護せし時に頃紀伊国
阿瀬川よりして人夫を云百人に兵粮をもたせて我中に城へ入むと
せしを楠氏に奪ひとられし遂に南朝に降りて延文元年飯盛山
の敵軍に北條中納言隆俊と及恩地牲川貴志田辺別当山本
判官等と共に此城に引籠る事太平記に見えたれバ其頃築
しなるべし
伊都郡飯盛山の條見合べし。楠二代軍記といふ雑書に元亨年中安田庄司保義盛の命に叛くによりて楠正成に命じ写しめ其地を正成に与ふと見えたれども該書に據なく且城地の形状を書けるにあたりて湯川直春の説のことなり此書ハ後人の妄作なれバ今此ら説或ハ此記によりて阿瀬川の地一旦楠氏の所となりしといふを採らず
又残桜記に文安元年後村

上院第六皇子上野太守説成親王の御子に前円満院門
主大僧正尊悟（或ハ尊胤）法王と申て始しかるが還俗まして義有
王と名のり給ひ義有王始めて大和河内和泉のゆかり
の浪人をかたらひて先吉野の山奥に籠りたる紀伊国牟婁
郡北山（義有王の御座所の小山に據させる地とさるや）といふ要害に坐て御籏を
挙給ひけるに（南方紀伝に忠義王のごとく記せるハ誤なり）やがて同国八幡城にたて
こもりたまふほどに熊野本宮の衆徒より南方の宮吉野
の奥にて御謀叛の聞え有りしと京への注進八月廿日に着事を
あかる事ありしむかて熊野三山ありたに注進もぐべきやかる
を新宮那智ありよりていまだ其事なき哉如何もしくハ
事に実否覚束なしさてハへと新宮那智の者どもも若し
宮方にもやありけむたとひ知らずとも縦るしおくべきにハいよく
事実ならバ先ゆるしおかれハさまたげよと武家大に驚き管領畠山



寺原村の新田小峠にて小半紙を製する図
扇下にてもつはら用る保田紙是なり

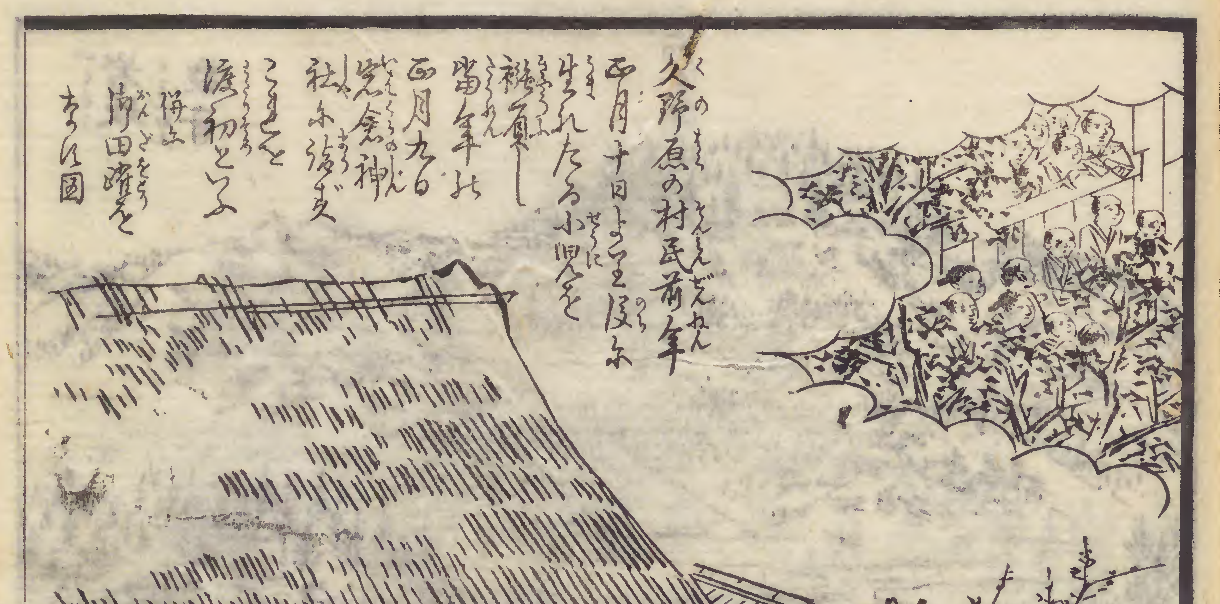
山持の人々紀伊の人等に下知して八幡城を攻させけるに
寄手利を失ひ南方勝に乗るよし聞えければ手勢にて細川出羽
守政元向て励しく攻れども城兵どもも防ぎ戦ひて其城をまもりて
殺く因に湯浅城中にて忠義ありて戦ひけるにやと見えたる八幡城
も此城なるべし 牟婁郡小山を去る事遠しといへども此地
東は大和国吉野郡に遥に接し山脈日高牟婁の両郡の地
に連りされば名草郡の古民間々を逐ひて窮に志を南方に
通じ宮く城を築き恢復を図りしなるべし　日高郡古井村に八幡社あり其あたりをも
城跡ともいひ伝ふる畑地ありて其地も八幡城といふまじきにもあらざれども
この城は今も其名を存し又石垣など城跡なども残りたれば其ようしとすべく覚ゆ
されど義兵王の為にしける地山といへるもたゞおぼろげなれば
書しざればなまし実は牟婁郡の山村いづくとも詳
には知がたし　又古人伝へいふ湯浅権守宗重の後裔を保田三郎太宗とて
河内国高屋城主畠山秋高に属して此城に居次秋高更に河内
国誉田にて二子安の地を与へ三郎嘗て多く浪人を聚め此者等に恩遇せしと譜
代の臣等憤懣を含み居しが或時三郎高屋に出仕せる留守に家臣一
揆を起し此城を襲ふ城の留守居戸上源左衛門安井勘解由杉谷小兵衛保田
掃部等防ぎ戦て三郎の妻子を助けて退城し此城遂に一揆の手に落ちし
を湯川直春双方を和解し一揆事を静まるといへども三郎が憤懣の余天正十一年
四月十日一揆の巨魁保田三郎左衛門其外の侍六十三人を誅して其の子
孝兄を憤りて言聖の僧徒を誘ひて同年六月七日秋野原鬼城を攻めて
三郎の族保田掃部を殺して此城を囲む湯川氏此を救ふ湯浅の白樫氏先
陣にて都合一万三千人六月十八日大に戦闘ありて敵味方手負死人一千三百人
僧徒等勢を退て後三郎湯川の次男を養子として此城に居らしむ其男は
織田に至りて柴田勝家に属し江州柳ケ瀬に戦死す
湯川次男は後に民氏南征に吉野に出奔すといふ

産物 保田紙

寺原村の新田に産す此地は紙漉業寛文年中に平
鎮官令ありて小半紙を製す今一種の産物とる
府下に用ゐて保田紙といふ近村にもこれを製するものあれど
も当国のごとくにも製せず織麻は御中にもらるれど他方よりも
そ至れ
とす

岩倉神社

久野原村にありて一村の産
土神なり丹生明神を祭れり
当社例祭の外に正月九日渡り初といふ式ありて是を年中神
事の第一とす其前年正月十日よりて以後に誕生せし男女
の子どもを聡し当社に詣で氏子となれる喜び神に奏
する儀といふなり其行列のさまを最初当社の神前にと書せる



久野原の村民前年正月十日より翌度に生れたる小児を綵衣し當年は正月九日岩倉神社に詣ず又これを流初といふ俗に御田植をするの圖

押手村

岩坂観音
観音堂
高野乃
日高川上

幟を捧げたるもあれ二人次に幣をもてる神子次に太鼓うち二人次に笛ふき二人次に榊を持る者を先として誕生の子に附そひたる婦女次に村中の者数人同音に神楽哥をうたひ太鼓の拍子をとりて謹んで練行す古風揃たるに堪へ世話にいと温雅なれど近世の式にはいつか混ずべし獅子舞をまぜて又傘を張り五色の紙を切て四手とし寶の如くなる笠の四方と真中とに挿し寶は前面に扇二本幾へ描て張りて神楽歌一二首を左に挙ぐ

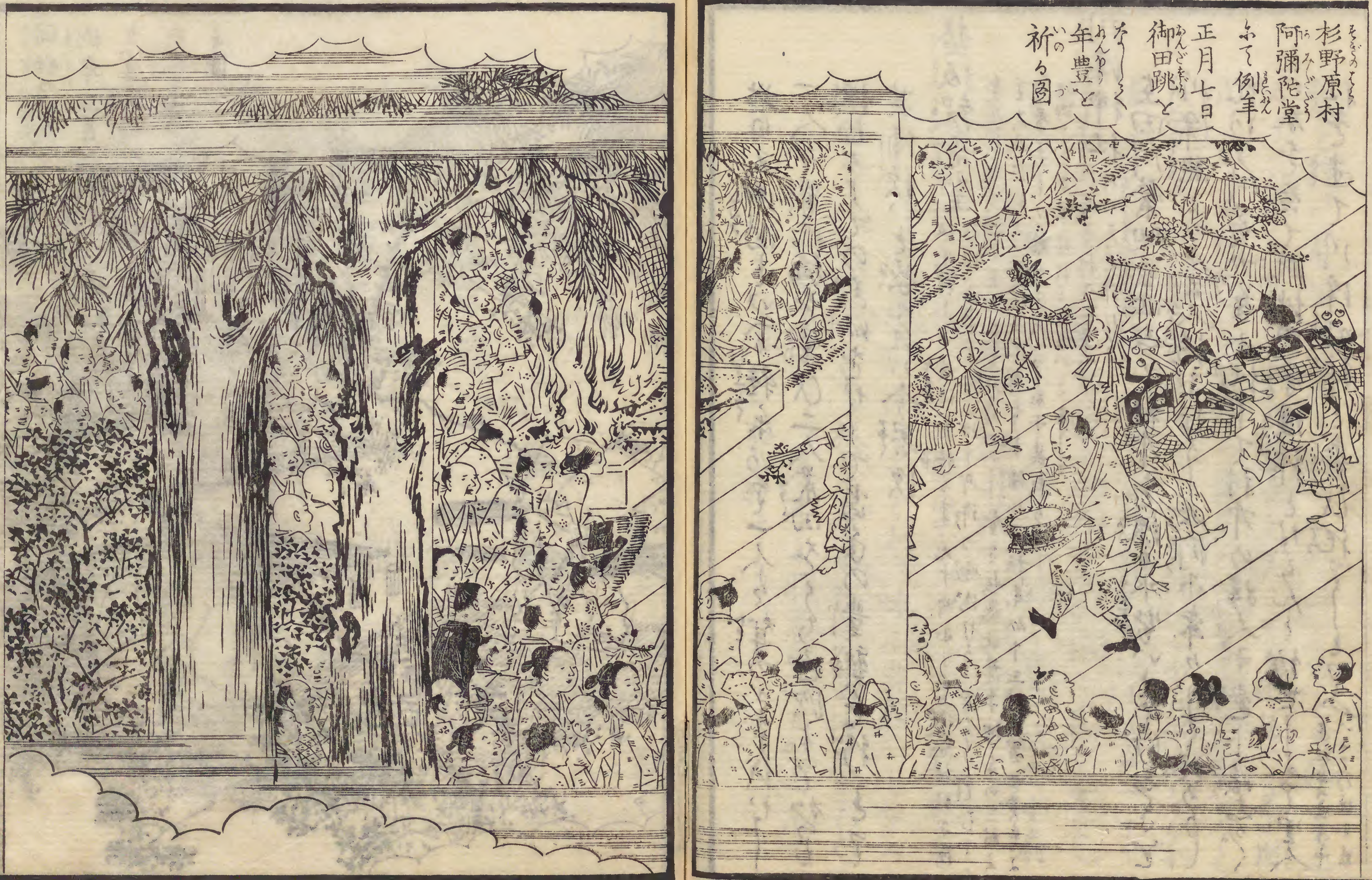
熊野山さらぎが王子の椰の葉よ紀州の人の笠のうへ八ざしぞよる　白鷺の羽をさしてぞ八幡山岩瀬の下ぞなれ雲のさぞぞよる　このもれ玉簾に纏ふる角鏡墨ならぬらして御覧ぞよ ぞよる　庭中に羽屋の口とかさ広て搗とる白よね播磨米の粉 ぞよる

此日又御田といへる雑楽あり一人は鋤の柄なりし一人は黒き面を掌び二人荒田をうち返すよりはじめて収むるまでの業を為して当年の豊熟を祝ふなり其涌詞いと長ければ今略す

盤坂観音堂　板尾村より沼谷を隔る事六十町ばかりにして沼谷村に接を近の佳山眼下に見おろして眺望の佳地なり堂より望む板尾秋野千押手の三村より番来して宝の祭例年此堂にて盂蘭盆踊あり板尾以下三村の男女群盛して近郷よりも来り集まるものいと多し

川津神社　秋野京村の産土神なり秋野京村に祠あり一

左田川縈廻屈曲して村中を流る水勢いとはげしきを川津瀧といふ古人傳へいふむかし此渕に年久しく住みけりし蛇あり村の少年に化して村中の婦人に通じ後ちにのかを告て此地の守護神とならんと約せしより里人社を建て川津明神と崇め祀りしといふ　其社今は手中いまの地に遷


杉野原村阿彌陀堂にて例年正月七日御田跳となして年豊を祈る圖

同村の村民例年正月十一日結的の式をなす圖

考ふるに此事いつの頃にか詳ならざれども近世那賀郡某村にても蛇の人に化して婦人に逢ひし小蛇を数多生めりし事ありしも其類なるべし

伊都郡宮和郷名田村の女妖蛇におかされ鐵のごとくほどきて蛇の子を産しきまれを一年だかくうみて死せし事古今著聞集に出でたり

阿弥陀堂

川津明神の境内にあり堂内にて例年正月六日夜御田といふ式あり杉の葉を以て牛の形を作りなど大きく造れど調声曲節ともさらにて古き世の曲にて牛を作り牛にかけし犂さげし水をし田の様にうつして植物の事あり編者の中にて乙女のいづる苗を田にて植ゑる事をなど行ふ古き世の遺風なり又同月十一日繊的の式あり堂外に荒薦をしきて村中の籍ある者左右に坐を分ち神主其正面に坐し榊椋の小木数本を立て又漢を適しる田地に耕を立て的串とし其の弓を引きて的を射る其田を即的田といふ左右の坐より村の者名一人づつを出してこれをいることくの儀に似たり一まづ射終りて左右八角の木にかけ小木を篝として八角の木乃ち神を祭りて神に供ぞ村の進退法ありて建てたる八角の木乃ち神をまつりて神に供ふる事のなりといへる事のなりとぞいへり疑なからんとつべ抑けちのまとは集にちのうちなどいへるに似たれば左一番づく射るなるべし御田の親楽にもけちまと里の神といへるも当社なるべし又古人やぶさめとも二百年前の書にやぶさめともあるもこれこのあらびの式なるべきを伝へみる處しるしくも見えそうなれど猶当社にのこれる事いとめづらし

志傳の木

押手村の入口にありて一抱許の樹あり村名の押手をとどめし古人押手の所縁ありてこれを越るなりと云ふ事或人万葉集にみえたる小為手山をしこれならんと云へる詠歌の山ともこれより東北を伊都郡とす

頭陽(こうざかい)

押手村より東北を伊都郡とし那賀郡との境也ゆゑに毛野の堺といふ

丹生神社

押手村にあり本社二社ともに神体を板に画けり板の裏に書ありて左に載す社傍より十福寺境内にあり

神像裏書

右造立意趣者願主現当二世諸願成就皆令満足為也相

攝國住人比丘祥満永享二年二月十六日

湯川

源大和国に揚上湯川村にて流出て下湯川湯子川の二村を経て清水にいたりて紀の川に合流す

八王子社

下湯川村にあり毎年正月三日同村の内中村下村大家二ケ所の座の者神前にて籤ありて流鏑しるの式をなし先着左右の座を定め前日其所の家にて的にとて米雑穀など合し鳥形を春き当日神前に左右に列坐してこれを祀りそのまゝ又式の日秋に入て丑の時に別当ちにて修正会あり社傍に神名帳とて一つもをよく次に列の帳にこれに三ヶ所の者の家の家系及前年より出生の小児の名を志るしるをよみあげて抵べ人名帳といふ中古よりの風俗なるべしされば三編に挙ぐる一言主社の祭事をあつめたる書のごとく古きまれもなし古なるべきかり紛失せし

温泉

湯子川の溪流にいさしかわき出るを温めて浴れとり湯子を湯川の借字なりともむべし

日光社
小雲取越
上湯川
上湯川へ
福井村
龍神へ

竜神道
在田郡下湯川村より日高郡敷垣内に至る山名を城ヶ尾といふ
城ヶ尾

平惟盛卿窟

上湯川村小松祢助といふ舊家にて家傳にむかし小松中將維盛卿熊野にて入水と偽りて日高郡龍神村の里枚谷乃山中に蟄居し後其子孫この地に移りて此地を領し元和年中より應米を上納して地士となる今枚谷山に小松谷の祠あり祠二社其外古跡あり又云淺野家の時に歳役又十枚を貢して徳役を免許せらる先祖の地なりしに元和以後宗米若干を以歳役に替しむ

日光神社

上湯川村よりも山を隔てて北の方に在名室川といふ地にあり霧谷の高山に在りて寛乳云月吹日一村乃惣社なり

郡の東隅の高山巓を白口峰といふ其嶺に一の峯窟縁起志て松柏蒼鬱たる中に此社を祀りて末社拝殿等あれど詣もうでしれども麓を去る事四十町許にして參詣まるも稀なれば枯葉堆く積りて踵を没す苔露滑みして青靄を吐き日色冥濛として登る事麓は夏も樹上より蛭おちて人を害すといふ去俗下野國日光權現を祀りてあるといへども祀神及勧請の時代等詳ならず次に図して社殿堂舎（中央社殿の図として小松氏に蔵む）

塔　薬師堂　釋迦堂　護摩堂　合せて四宇各四十所宮蔵一ヶ所寺院六ヶ坊ありて壮麗なりし事日光三十八社といふとぞ社殿のさま熊野に

似て今此社地法本甚浅くして数十宇の堂社建連ねたる跡地なりしとぞへさゝら鏡なりしといふ礼後の考をすゝむ　多加てしに寛永年中焼失せりといへば遊去の社地にてありしけるべし又云昔は田川の上下まで十里許の産土神なりしかば今も流村より別に神宮料を納むる事あり又この神の忌とのふとて室川の地金鐃子を禁じ耕に牛を用ゐる事を制すといふ

堺が森城

同郡龍神へ越る道にして下湯川の内福井より東南七十町にして札の辻といふに至る此を二郡の境とすそれより又七十町にして龍神の内小又川に至る此山高く嶮なりといへども温泉へ乃運漕なれば次以て郡界の山径に比ぶれば寛しく牛馬を放てもぜざるとども容病人乃山轎を絶次ことを往來次祇南海龍泉紀行云城森山最高路最險斗折蛇行捫蘿而登々九里始至山巔風吹鬢髮不可久憩南下九里云云とあるをこれ地をいふなり

國堺

白口峰日光山峯也峰を大和國吉野郡十二村郷にさかひ東村十津川郷野東村の堺とし實に深山幽谷無人の境なり

紀伊名所圖會後編巻之三終

国立公文書館
National Archives of Japan